
美太の不思議な旅

克也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美太の不思議な旅

【Nコード】

N0334W

【作者名】

克也

【あらすじ】

10歳になった美太は「スカイ地方」を舞台に仲間とともに旅をしていく。

美太はこの旅で何を得るのか・・・

この物語はポケモン擬人化が含まれています。苦手な人は読まないでください。

あと作者は文章力が少し低いです。

美太の不思議な旅／登場人物紹介／

／美太の不思議な旅／登場人物紹介／

美太^{みーた}：この話の主人公。人にもポケモンにも優しい。

バトルとなるとかなり冷静になる。かなりクール。

祐也：美太の友達。のんびり屋。影が薄い時がある。

ミイシエ：美太のパートナー。語尾に「〜でしゅ」が付く。美太のことが好き。人見知りする時がある。

葵^{あおい}：祐也のパートナー。祐也のことを慕っている。

香織：ちょっとした事で美太達と旅をすることとなった。
かわいいものが好き。

拓哉：香織のパートナー。よく読書をしている。

美太の不思議な旅〜登場人物紹介〜（後書き）

どもども。克也です。

この話が初投稿です。あまり過度な期待はしないでください。

あ、それと、俺は月に2回くらいしか更新できないのでそこもよろしく願います。

（月に2回以上更新できる時もあります）

第1話 最初の出会い

俺の名前は美太。

今日から10歳になる。

そしてポケモントレーナーになる。

そう、今俺は友達の祐也と佐久間博士にポケモンをもらいに行く道中なのだ。

祐「いよいよだなあ」

美「ああ、この道を抜けたら博士のいるアサヒタウンだ。」

祐「俺はどんなポケモンがもらえるのかな」

美「さあな、お、着いたみたいだな」

佐「あ、いらつしやい！」

美・祐「お願いします」

佐「ささっ入った入った」

やはり、博士の研究所はすごい。いろんな機械がある。

佐「ここに4つのモンスターボールがある。

中にはポケモンがいるのだが…」

美「どうしたんですか？」

佐「いやあ、さっき落とした拍子にグチャグチャになっちゃって、」

博士が頭をかきながら言う。

佐「二人が適当に選んだポケモンが最初のポケモンってことで良いかい？」

美・祐「良いです」

佐「おお、それはありがたい。それでは、選んでくれ」

博士が差し出した箱の中にはモンスターボールが4つあった。

祐「じゃ、俺はこれにする」

そう言つて祐也は左上のボールをとった。

俺はどれにしようか…そんな事を考えながら残った3つのボールを見た。

美「ん？」

俺は右下のボールからテレパシー的な何かを感じた。よし、こいつにしよう。

佐「さ、決まったようだね。それでは出してみよう。」

美・祐「ポケモン、出て来い！」

ボールが開き二つの影が出て来た。

祐也の前にはフード付の水色の服に下も同じく水色の短パンの男の子がいた。

そして俺の前には黄緑色の髪に花の髪止め、白地で袖の先がピンク色の服に下も同じく白地に先がピンク色のスカートをはいた女の子がいた。

佐「祐也君のポケモンはポッチャマだよ。そして美太君のポケモンはシェイミだ」

葵「葵あおいです、よろしく」

ミ「ミイシエでしゅ、よろしくでしゅ」

祐「祐也です、よろしく、葵」

美「俺は美太だ、よろしく、ミイシエ」

佐「さて、君達二人にポケモン図鑑を渡そう」

美・祐「ありがとうございます！」

佐「それでは新しいトレーナー諸君！ そのポケモン図鑑に多くのポケモンと思い出を刻む旅に出発するのだ！」

みんな「はい！」

こうして美太と祐也はそれぞれ一匹ずつポケモンを連れて旅へ出て行くのだった。

（第2話へ続く）

第1話 最初の出会い（後書き）

さあ、はじまりました！「美太の不思議な旅」

とりあえずあまり書くことないので（おい）第4話まで書きません。
よろしくね〜

第2話 旅の仲間（前書き）

第2話！！はじまります

第2話 旅の仲間

俺達三人はアサヒタウンを出て、次の町、トヨタシティへ向かって
いた。

祐「トヨタシティはスカイ地方一の大会で、そこにはジムリーダ
ーの創谷さんがいるよ」

美「そうか…じゃあまずはそのジムに挑戦だな」

ミ「いよいよでしゅね、ミーの腕になるでしゅ！」

美「そうだな、…ん？」

あれ？なんかいま草むらが光ったような…

ミ「どうしたんでしゅか？」

美「いや…なんかそこの草むらが光ったから…。俺調べて来るよ」

ミ「ミーも一緒にいくでしゅ！」

祐「あつ…まつ待つてー」

影の薄い祐也を置いて俺とミイシエはさっき光った草むらを調べた。
するとそこにはモンスターボールがあった。

美「モンスターボール？中にポケモンがいるのかな」

とりあえず投げてみようという事になり、ちよつと開けた場所に行
った。

美「よし、投げるぞ…えい！」

するとそこから全体的に黄色の服に下は灰色の短パンの男の子がで
てきた。

？「ふえっ？こ、ここは…」

美「ここはトヨタシティへ行く途中の道。俺は美太だ。お前は？」

拓「僕の名前は拓哉と言います。種族はピカチュウです」

祐「僕は祐也だよ」

ミ「ミーはミイシエでしゅ」

美「そういえば拓哉、お前ボールの中に入っていたよな、パートナ
ーは…誰なんだ？」

？「あ、いたいた！」

拓哉より少し背の低い女の子がこっちに走ってきた。

？「良かったあゝ見つかった！拓哉君、この人達は？」

拓「この人は美太さん。こっちは祐也さん。そしてこの人はミイシエさんだよ。あつ美太さん、こちらは僕のパートナーの香織です」

香「香織です、拓哉君を見つけてくれてありがとうございます！」

美「いやいや、別にいいよ。たまたま見つけただけだし」

香「それでは私達は次の町に行くので」

美「あ、待って！」

俺がそう言つと二人はこっちを向いてとまった。

美「良かったら一緒に旅をしないか？」

香「え！いいんですか！ありがとうございます！」

美「旅は人数が多い方がいいしな」

祐「そうだね」

こうして美太達は新しい旅の仲間と共にトヨタシティへ向かうのだつた。

（第3話へ続く）

第3話 助ける

俺達はトヨタシティに着いた。

美「やっと着いたな」

香「うわぁゝすっごい人の量!!」

トヨタシティはかなりの大都会で、多くの観光客や会社員がいた。

美「まあ、大都会と言っただけあるな」

祐「まずはポケモンセンターで部屋を取っておこう」

俺は今の時間を調べた。

17:45だった。

美「ついでにもう休むことにしようぜ。俺も流石に疲れたよ」

ミ「ミーも美太に同感でしゅ」

祐「そうだね。それではセンターに行きましょう」

みんな「おー!」

そしてポケモンセンターに着いて俺達は部屋に入った。

香「それじゃ、私は先にお風呂に入って来るね。ミイシエ、一緒に

入ろっ」

ミ「入るでしゅ!」

そう言っただけで香織達は風呂に入って行った。

祐「あの二人も行ったし僕達はこれをやりますか」

そう言っただけで祐也はポケモンカードを取り出した。

美「お、いいな。やろうぜ」

俺と祐也はポケモンカードを3戦やり、俺は2勝1敗だった。

ちょうど3戦目が終わった頃に香織達が戻ってきた。

香「ふうーあつたまつたー」

ミ「気持ち良かったでしゅ」

美「じゃ、俺達も入るか」

そうして俺達は風呂に入っただけでその後部屋で寝た。

次の日:

美「んー、ん？うわあああ！」

俺が驚いた理由は隣のベッドで寝ていたミイシエが俺のベッドで寝ていたからである。

…やけにいい匂いがすると思ったらミイシエだったのか。

祐「ふああー、どうしたの美太？」

美「い、いや、起きたらそっちのベッドで寝てたはずのミイシエが俺のベッドで寝てたから…」

ミ「だ、だってーベッドの中が冷たくて、美太のベッドに入ったらあったかいかなーって思ったから入ったんでしゅ」

…確かに今は冬だが、だからって女子（？）が男子のベッドに入っているわけ無いだろ。

ってか顔が赤いぞ、お前。

香「そういえばなんでミイシエはボールの中に入らないの？」

美「ミイシエはボールの中みたいな狭い空間が嫌いなんだよ」

そんな話をして今日が始まった。

美「さて、俺はミイシエ達の特訓をしようかな」

美「そういえばなんで香織はジムとかコンテストを選ばないで自分探しをしているんだ？」

香「それは、私のママがトップコーディネーターで、私は私なりに何かで一番になりたいなって思ったからなの」

祐「もしかして香織のお母さんって優佳さん？」

美「優佳さんってあのグランドフェスティバルで3年連続優勝したって言う？」

香「そうです。私のお母さんはその優佳さんです」

人っているんな繋がりがあるんだなーとその時思った。

そんな話をしていたらトヨタシティのはずれの草むらに着いた。

祐「都会でもすこしはずれたら自然がいっぱいだね」

美「よし、ミイシエの特訓だー！」

そうして俺とミイシエは3匹くらい倒した。

そして4匹目。

美「お、あそこの草が揺れてる、行ってみるぞ」

そうして行ってみると、上が水色、下が黒の格好をしたポケモンが飛び出してきた。

そいつはキヨロキヨロと辺りを見回して俺達を見つけ、こっちに来た。

？「たつ、助けて下さい！」

美「どうした？」

？「あそこの人がすごく強いポケモンで僕に攻撃して来るんです！」

美「そいつはいかな。よし、ミイシエ、特訓ついでにそいつを倒すぞ」

ミ「わかったでしゅー！」

すると…

？「おい、お前、そこをどけ。そいつは俺の見つけたポケモンだ」

美「俺は『お前』じゃない。俺は美太だ。それにこいつを強いポケモンでいじめてたらしいな。そんな奴にポケモンと旅する権利はねえ！」

隆「はあ？お前この隆邪様にどういう口きいてんだよ。何様のつもりだあ！」

美「うーん、10歳だから…お子様かな」

隆「この野郎、その口、俺のポケモンでできなくさせてやらあ！」

美「来るぞ！ミイシエ！」

ミ「OKでしゅー！」

隆「出で来い！岩鉄」

岩「バトルならこのイシツブテの岩鉄様に勝てる奴などいない！」

バトルが始まった。

美「ミイシエ、はっぱカッター」

するとミイシエの手から葉を出し、投げた。

岩「うわああああ！」

相手にクリーンヒットだってらしく、すぐに戦闘不能になった。

隆「につ、逃げろー！」

そう言つて隆邪は走り去つた。

美「チョロい奴だったな」

ミ「そうでしゅね」

電「助けていただき、ありがとうございます。申し遅れました。僕は電丸と言います。種族はコリンクです」

美「俺は美太だ。電丸、もういじめられるなよ。それじゃ俺達はシテイに戻るよ」

電「待つて下さい！」

そう言われたから俺達は立ち止まり、振り向いた。

美「どうした？」

電「良ければ、仲間にしてもらえませんか？」

美「いいのか？」

電「はい！」

美「よし！電丸、ゲット！」

俺は電丸の前でボールを開けた。すると電丸はボールの中に吸い込まれ入った。

そつして俺は電丸を仲間にして、トヨタシティへ戻った。

（第4話へ続く）

第4話 ジム戦！！VS創谷さん 前編

トヨタシティに着いて、4日目。

美「よし、もうそろそろジムに挑戦しようかな」

祐「そうだね。ミイシェや電丸達もかなり強くなっただしね」

そんなこんなで俺達はトヨタシティジムへ向かった。

その途中…

？「お、お前は…。そうだ、美太と祐也だ！懐かしいな」元気だったか？」

美「その声は、秀先輩じゃないですか！！」

秀「そうだ。君の秀先輩だよ。おおーい！直人！こんな所で美太達見つけた」

直「えつまジで！お、本当だ！久しぶり！美太、祐也」

祐「直人先輩まで！！お久し振りです！」

香「美太、この人達は？」

美「俺達の先輩だよ。直人先輩はシングルバトルのプロフェッショナルで、秀先輩はダブルバトルのプロフェッショナルなんだ。そしてこの二人が組むマルチバトルは最強と言われているんだ！！」

香「まさか秀さんってあのダブルバトルでチャンピオンに勝ったって言う？」

秀「まあ、美太の言う事は大袈裟だけど、君の言う事は合っているよ。それと、直人だってシングルでチャンピオンに勝ってるし」

その後とりあえず香織やミイシェの紹介をした。

直「ふーん。シェイミのミイシェか…なかなか面白いね」

秀「そういえばこっちの紹介を忘れてたな。こいつは優だ」

そう言っで紹介された女の子は全体的に黒のドレス（下はミニスカ）で背中に黒い翼があった。（その子はポニテがすごく似合っていた）
優「優です。種族はゼクロムよ」

祐「ゼクロムってあのイッシュ神話に出て来る？」

優「ええ、そうよ」

直「こっちは竜我だ」

竜「俺は竜我。種族はレシラムだ」

祐「れ、レシラムもですか…」

竜「まあ、そうだな」

竜我と紹介された男の子は上が白色のパーカーで下も白色の長ズボンの格好だった。（彼も背中に白い翼があった）

美「先輩達って、何者なんですか？」

秀「うーん、伝説のポケモンがパートナーの普通のトレーナーかな…」

祐「ってか伝説のポケモンがパートナーの時点で普通じゃないですよ」

そーかなーと言って首を傾げる。（いつもこの二人にはびっくりさせられる）

香「なんか…実際に話してみると秀さん達って面白いね」

美「まあ、そういう二人なんだよ」

直「そういえばお前らセンターから出て来たけど、どっかに行こうとしてたの？」

祐「ああ、それは美太が今からジムに挑戦しに行く途中なんです」

秀「お、それは面白いな。俺達も一緒に行って美太の戦いぶりをみるとしますか！」

直「そうだな、美太、相手は水タイプだけど、大丈夫か？」

美「ええ、その辺は大丈夫です。その為にかなり特訓をして来たんで」

秀「ほほう、それは楽しみだ。じゃ、と言う訳でトヨタジムへLet's go！」

み「おー！」

かくして美太達はトヨタジムへ向かった。

祐「うう、なんか緊張するなあ」

美「って、祐也が緊張してどうする」

そうだね、と言いながら祐也は笑っていた。（祐也はこういう所で天然なのである）

秀「とりあえず美太は挑戦者なんだから礼儀良くするんだぞ」

美「その辺は大丈夫です。んじゃ、」

そう言う和美太は目を閉じて深呼吸する。

そうして美太が目を開けると美太の目付きが少しきつくなる。

今彼は本気モードとなった。

美「いっちゃやるとしますか」

美太はジムのドアを開け、

「こんにちはー、よろしくお願いします！」
と言った。

すると、暗かったジムの照明がつき、奥から男の人がでてきた。

？「おや、二日振りの挑戦者だねえ、って秀君じゃないか！それに優ちゃんに直人君、竜我君まで！みんなどうしたの？」

秀「お久しぶりです。創谷さん。まあ、今日用があるのは俺じゃなくて後輩のこいつですがね」

創「ほほう、そうなのかい。挑戦者の方、名前は？」

美「美太です。よろしくお願いします」

創「はい、よろしく。僕はこのトヨタシティジムのジムリーダー、創谷です。今日は挑戦かい？そりや楽しみだ。秀君もそうだろう？」

秀「そつすね。俺の後輩がジムに挑戦するのはそりや楽しみつすよ」

創「よし、んじゃ美太君はフィールドまでいって。秀君たちはあつこの観覧席へ行ってくれ」

創谷さんに指示された通りに進み、位置に着いた。

創「さて、それじゃ、始めますかまずはジム戦のルールを説明をしよう」

俺は創谷さんにジム戦のルールを教えてもらった。

表に表すとこんな感じだ。

1：バトルは3対3でおこなう

2：決めた3体の内、2体が倒されると負けとなる

3：ポケモンの交替は挑戦者のみ可能である

4：挑戦者が勝った場合証明としてリーグバッジが渡される

5：8つのジムがある町でリーダーに勝ち、バッジを8つ全て集めるとポケモンリーグに挑戦出来る

：まあざっとこんな感じかな。

創「それではルール説明も終えたし始めますか。ゆけっ、里花！」

創谷さんが出したポケモンはオレンジのパーカー（フードはかぶっておらず、髪型はポニテだった）に下がオレンジのスカートの女の子だった。

ポケモン図鑑で調べると

図鑑「ブイゼル、うみイタチポケモン」

と、言った。

美「んじゃ俺は、出番だ、電丸！」

相性の良い電丸を出した。

創「美太君の先攻でいいよ」

美「んじゃ、お言葉に甘えて、電丸、でんこうせっか！」

電丸は目にも止まらぬ速さで里花に攻撃する。

創「よける！里花！」

：と、言われ、里花は攻撃をよけようと試みるが、電丸の速さに負け、少し後ろに吹っ飛ばされてしまった。

創「なかなかやるね、美太君」

美「ありがとうございます。でもちよつと待って下さい。なあ、電丸、」

電「なんですか？美太さん」

美「お前、相手が女の子だからって手加減しただろ。これは真剣勝負なんだから本気でいけ。いいな」

電「やはり分かってましたか。本気で良いのなら、」

電丸も本気の目付きとなる。

電「勝ちにいくだけです」

創「おおっ、本気になった。もっと楽しくなりそうだ」

創「里花、アクアジェット！」

里「私も本気で行くわよ！」

美「電丸、よける！」

電「よつと」

電丸がよけ、里花の背後を捉える。

里「しまった！」

秀「よし！電丸が里花の背後を捉えた！これなら勝てる！」

美「行けっ、スパーク！」

電丸が放ったスパークが里花にクリーンヒットし、効果は抜群。里

花は目を回して戦闘不能になった。

美「よし！一勝目ゲット！あと一体だ！」

創「なかなかやるね。次はどうか？」

そう言って創谷さんは次のポケモンを出した。

（第5話へ続く）

第4話 ジム戦!!VS創谷さん 前編(後書き)

第4話!!

ちなみに秀は”すぐる”と読みます。

ここで問題!

この話の中に、俺をモチーフにしたキャラがいます!
さて、だれだ?

第5話 ジム戦!!VS創谷さん 後編(前書き)

第4話の答えは・・・そう、秀君です!!
ってことで、第5話スタート!!

第5話 ジム戦！！VS創谷さん 後編

創「次はどうか？ゆけっ広司！！」

創谷さんの次のポケモンは上が青のジャージに下が水色の長ズボンだった。

図鑑で調べるとタマンタらしい。

美「電丸、次も勝つぞ！たいあたり！」

電丸が思いつきり広司へたいあたりする。

広「あらよつと、危ない危ない。リーダーの為にもここで負けるわけにはいかないからね」

だが電丸の攻撃はよけられてしまう。

創「広司、みずのはどう」

広司が腰の下くらいで手に力を集中させるとそこから水の玉ができ、それを電丸に向けて放つ。

美「しまった、よける！」

しかし、電丸はよけきれずくらってしまう。

ドカーン

優「で、電丸君！」

土煙がなくなり、そこにはやられて目を回してたおれた電丸がいた。

美「だめだったか、戻れ、電丸」

創「なかなか強かったよ。さあ次で泣いても笑ってもこれが最後だよ」

美「よし、ミイシエ、次はお前だ。頑張って創谷さんに勝つぞ」

ミ「了解でしゅ。勝つでしゅよ」

創「広司、アクアジェット！」

美「ミイシエ、よける！」

広司の素早い攻撃をよけ、背後を捉える。

美「そのままはっぱカッター！」

ミイシエがはっぱカッターを繰り出す。

創「アクアジェットの勢いで右へ曲れ！」

ミイシエと広司は回避と攻撃を上手く使い白熱とした戦いを繰り広げている。

美「ミイシエ、マジカルリーフ！」

ミイシエが出した攻撃ははっぱカッターとは違い、色鮮やかなのはっぱだった。

創「広司、よける！」

しかし、広司は疲労の為上手く回避できずくらってしまい、目を回してたおれた。

美「よっしゃー！勝ったー！」

創「よく頑張ったね。それでは証明としてここのジム公認のバッジを進呈しよう！ってあれ？」

創谷さんは服などのポケットをさぐっている。

美「どうしたのですか？」

創「ごめん、バッジと君に渡すはずの道具を館内に忘れたからちよつと待ってて！」

創谷さんは館内へダッシュして取りに行った。

待っていると先輩達が降りて来た。

秀「おめでとう！まずは一個目だな。…で創谷さんはどうしたの？」

美「なんかバッジとその他もろもろを忘れたらしいっすよ」

秀「あの人3年前とあんまり変わってないな」

美「先輩達がバッジをもらった時もあんな感じだったんですか？」

秀「ああ、俺がもらった時もああやって館内に忘れ物してたよ」

俺と秀先輩が話していると創谷さんが戻ってきた。

創「ごめん、はい、これがジムバッジだよ」

創谷さんがくれたバッジは全面水色のきれいなバッジだった。

創「それとこのみずのはどうのわざマシンもあげるから使ってくれ次にくれたのは青色のCDのような物をくれた。」

創「わざマシンは何度使っても無くならないからね」

美「ありがとうございます！」

創「そういえば美太君、次はリュウジンシティへ向かうのかい？」

美「まあ、そうですね」

創「秀君もかい？」

秀「うーん、今考え中です」

創「えっと、ちよつとリュウジンシティジムのリーダーにお届け物をして欲しいんだけど、良いかな？」

秀「言うって創谷さんは茶色い紙包みを差し出した。」

秀「あいつにつすか？分かりました。じゃあ奴に届けておきますね」

創「よろしく頼むよ」

とりあえず明日シティを出ることにしたのでセンターへ戻った。

秀「んじゃ、また明日」

美「おやすみなさーい」

…次の日…

俺が朝起きるといつものようにミイシエが俺のベッドの中で寝ていた。

最近寝る時に一緒にベッドに入るのである。

祐・香「おはよう、美太」

美「ん、おはよう、二人とも」

祐「そういえば秀先輩達遅いね。朝は僕達の部屋で食べるって行ってたのに」

美「そうだな。んじゃ俺起こして来るよ」

俺は秀先輩達を起こす為に部屋へ行った。

先輩達の部屋のドアをノックしようとする。

ガチャ。

直「あれ？美太じゃん。どうしたの？」

美「先輩達が起きて来ないので起こしに来ました」

直「おっ、ちようどいい。秀を起こしてくれないか？あいつ寝起き悪くてさ」

美「はい。じゃあ先輩は先に俺達の部屋へ行って下さい」

そうして直人先輩と別れた俺は秀先輩を起こす為に部屋に入った。

美「秀先輩」朝ですけどー早く起きない…って先輩…」

先輩の寝ているベッドをみると先輩と優さんがおなじベッドで寝ていた。

秀先輩は普通に寝ていて、優さんが秀先輩を抱いて寝ている感じである。

…よくみると二人とも気持ち良さそうに寝ていた。

でも、朝なので二人には悪いが起こす事にした。

美「秀先輩、起きて下さい！朝ですよ！」

秀「んっ、お、おはよう、優ちゃん」

いや、俺は優さんじゃなくて美太ですけど…

美「なに寝ぼけているんですか、もう朝ですよ。ほらっ優さんも、起きて下さい。朝ご飯無くなっちゃいますよ」

秀「んーん？あつ、おはよう、美太。朝か…。優ちゃん、起きろー

朝だぞ」

秀先輩が隣で寝てる優さんを揺らす。

…優さんも、起きた。

優「あつ、すーくん、美太君、おはよう」

かくして二人を起こした俺は部屋に戻った。

…これは余談だが、二人の行動を見ててああ、この二人は仲良しなんだなあと思った。

実際に直人先輩に聞いてみると、二人はカップルらしい。

そして、俺達は朝ご飯を食べ、出発の準備をした。

美「んじや出発しますか」

祐「そうだね。創谷さんから頼まれ事もあるし」

美「先輩、準備はいいですか」

秀「ああ、とりあえず少しくらい届けるのは遅れてもいいって創谷さん行ってたし」

美「よし！それでは次の町リュウジンシティへ行こう！」

そうして俺達は次の町へ向けて出発した。

（第6話へ続く）

第6話 秀先輩と優さん

トヨタシティを出発して二日目。俺達は次の町、リュウジンシティへ行く為、サナゲの森を移動していた。

優「んー。森は空気がきれいだなー。都会も良いけどたまには森に行くのもいいわね」

秀「そうだねー」

と、秀先輩と優さんの二人は俺達の後ろで歩いている。

香「優さんっていつも秀さんと一緒ですよ。…なんで秀さんと旅をすることにしたんですか？」

優「それはね、あの時秀君は冷静な判断と優しさで暴走していた私を助けてくれたのよ」

香・美「ぼ、暴走？ですか」

優「あれは…5年くらい前だったかしら」

優「私はイッシュ地方の『リュウラセンの塔』で暮らしていたの」

優「ある日、私を捕まえてイッシュを征服しようと企むプラズマ団つてのがいて、そいつらのせいで私は暴走してしまったわ」

優「その時秀君は殿堂入りをしていてこっちに戻るところだったの」

秀「久しぶりに来たなー、セツカシティ。…それにしてもなんだか騒がしいな」

町の人「大変だ！リュウラセンの塔が変な集団に壊されてる！」

優「偶然、セツカシティでこの事を知った秀君は奴らを止めるべくリュウラセンの塔へ向かったわ」

優「あの時から秀君はかなり強かったからプラズマ団を止めるのは簡単だった」

秀「とりあえず大方片付いたな。あとは…こいつだけか」

優「…でも奴らを止めても私の暴走は止まらず、その時理性の無かった私は秀君と戦いになった」

優「やはり秀君は強く、あと少しで倒される所で私は気を失った」

優「その時私は心の中でああ、私はまた封印されて窮屈な暮らしをするのか…と思ったわ」

優「気がつくと私はセンターのベッドで寝ていた」

秀「お、起きたな。怪我は…大丈夫か？」

少し痛む所を見るとそこには包帯が巻いてあった。

優「え、ええ、少し痛むけど、大丈夫よ」

秀「そうか、んじやいいな。…そういえば自己紹介を忘れてたな。

俺は秀だ。お前の名前は？」

優「ゆ、優よ」

秀「あのさ、優ってこれから行くとこあんの？」

優「うゝん、無いかな…」

秀「んじや、一緒に旅をしないか？」

優「旅をしないか？…それは私の心の中で強く響いたわ。」

優「そうして私は秀君と旅をすることになったのよ」

美「へえゝ、そんな事があつたんですかゝ」

秀「事実、優が倒れて、怪我の手当てをしてたら、優に恋しちゃっ

たんだよねゝ」

香「ふふ、優さんの話を聞いていたら秀さんの意外は一面を見つけ
た気がします」

秀「そうか？お、森の出口だ」

美太達はこんな話をしながらリュウジンシティへの残りの道を進ん
でいった。

（第7話へ続く）

第6話 秀先輩と優さん（後書き）

ここだけの話。

この第6話は話の中で1番書いてて恥ずかしかった話です。
ほんと書いてる途中で悶絶しそうになりました。
どうでもいいけど優ちゃんは17歳です（竜我君も）

第7話 秀先輩の友達 前編

サナゲの森を抜けて、俺達はリュウジンシティに着いた。

秀「とうとう着いてしまった」

美「とうとうって何か悪い事でもあるんですか？」

秀「ああ、それは…」

秀先輩が喋ろうとしたら後ろから声がかけられた。

？「お、お前は… チャン・スーじゃないか！」

秀「おい、中満、誰がチャン・スーだと」

中「嘘だって、久しぶりだな、秀」

秀「おう、久しぶり」

美「先輩、この人は… 誰ですか？」

秀「こいつは中満。ここリュウジンシティのジムリーダーさ。中満、こいつが美太でこいつが…」

と、直人先輩を除いた俺達を紹介した。

中「みんなよろしく。そういえば創谷さんがオレが頼んだ物を秀達に渡したって聞いたんだが」

秀「あれーそんなの渡されたっけー覚えてないな（棒読み）」

中「お前、ケンカ売ってんの」

秀「お、この俺と勝負するっての？ いいぜ久しぶりにやるとしますか！」

美「落ち着いて下さい、先輩、… この人つては勝負となると止まらなくなるんだから」

…と、言う訳で中満さんと秀先輩は勝負することになった。

ルールは1対1のシングルバトルで、自分のポケモンが戦闘不能になつたら負けとなる。（ちなみにポケモンはなにを出してもいい）

ちなみに二人に勝負の意気込みを聞くと、

秀「まあ、もう俺は昔とは違うんだ。勝てるに決まってる」

中「あいつだって前よりは強くなっているだろうけど、俺に勝てる

訳ないな」

…なんだか二人とも自信に満ち溢れているな」と思った。

美「とりあえず、勝負開始！」

中「ゆけっ、勝喜！」

中満さんが出したポケモンは茶色と黄色のストライプの服に下は茶色の長ズボンのポケモンだった。

図鑑で調べるとミルホッグらしい。

秀「よし、俺は…優ちゃん、やれるか？」

優「もちろん、いけるわよ」

美「二人とも出したところで…始め！」

秀「優、ドラゴンクロー！」

中「勝喜、よける！」

勝喜はよけようとするが、優の速さに負け、くらってしまふ。

勝「ぐはっ、くそっ、まだまだ！」

中「勝喜、フラッシュだ！」

勝喜さんはカメラのフラッシュのように強く光った。

優「きゃっ」

優さんが光に反応して顔を隠した

祐「やばい！このままだと攻撃されてしまふ！」

中「いまだ！すてみタックル！！」

勝喜が思いつきリタックルをする。

秀「やべっ、優、そらをとぶで勝喜の攻撃をよける！」

優は空へ飛んで行き、勝喜の攻撃をよける。

秀「そのまま勝喜に向かって突っ込め！」

優が飛んでいる状態から勝喜のいる地上向かって急降下していく。

中「しまった！でんこうせっかでよける！」

秀「いける範囲で勝喜を追跡しろ！」

勝喜はでんこうせっかでよけるが、追跡されていた為、直撃する。

勝「うわああああ！」

勝喜は目を回してたおれた。

秀「よつしゃ！勝った！優ちゃん、頑張ってくれてありがと…って優ちゃん？」

優さんは勝喜の方を向いている。

…その目は真紅に染まっていた。

美「先輩、優さんはどうしたのですか？」

秀「や…やばい、相手がミルホッグだから5年前の事を思い出して、その…優ちゃんは…ぼ、暴走…している…かも…」

み「ええええ！」

すると優さんは体全体に電気をまとって空へ上がって行った。

…だがさっきの勝負で体力がなくなっただろう。まとっていた電気がなくなり、地上へ落ちて行く。

秀「優ちゃん！…ああもう！竜我！俺を優ちゃんめがけて投げろ！」
竜「いいのか？んじゃいくぞ…おりゃ！」

秀先輩は竜我になげられて飛んで行く。

そして優さんをキャッチし、地上に降りる。

美「先輩！優さん！」

秀先輩の近くに駆け寄ると、秀先輩は…泣いていた。

秀「ごめん、俺のせいで、お前をこんな目に合わせてしまっ…」
美「秀先輩…」

なんて声をかければいいのか考えていると中満さんが言った。

中「とりあえず、美太、お前はセンターで部屋を取っておいてくれ。祐也、お前はショップでかいふくのくすりを買ってきてくれ」

美・祐「はい！」

中「秀、ちょっと待ってくれ、少ししたら美太が部屋を取ってきてくれる」

秀「ありがとう。お前が友達で良かったよ。…なんか元気でよかったよ、センターへ行こう」

秀と中満はセンターへ向かった。

（第8話へ続く）

第7話 秀先輩の友達 前編（後書き）

ちよつと悲しい話です。

次は第8話！！

楽しんでね〜

第8話 秀先輩の友達 後編

秀「よし、センターへ行こう」

秀と中満はセンターへ向かった。

美「まだかなあ、先輩達。…あつ、いたいた。先輩！こっちですよー！」

秀「ありがと、美太。んじゃ、もう中満は帰って良いぞ」

中「りょーかい。また後でな」

そう言つて中満さんは帰って行った。

その後俺達は部屋に行き、ベッドに優さんを寝かせ、祐也の帰りを待った。

直「秀、優ちゃんは…大丈夫なのか？」

秀「ああ、とりあえず体力がなくなっただけだからそんな大変な事にはならないよ」

その言葉を聞いて、俺達は安堵する。

ガチャ

祐「ごめんなさい、遅れました。先輩、はい、かいふくのくすりです」

秀「お、ありがと。んじゃちょっと悪いけど」

そう言つて先輩は優さんの体の傷に薬を吹きかけ、そこに包帯を巻いた。

美「そういえば優さんが繰り出そうとした技ってなんだったんですか？」

秀「ああ、それは優の固有技で、クロスサンダーと言うんだ。体全体に電気をまとして、空へ上がり、そして相手めがけてぶつかる攻撃さ」

直「そして、竜我のクロスフレイムと一緒に繰り出すとかなりの強さになるんだ」

直人先輩も説明に補足する。

美「へえ〜そんな技があるんですか」

そんな話をしていると、優さんが、おきた。

優「んっ、ここは…あっ、痛っ」

秀「ああ、あんまし動くな。とりあえず寝とけ。…ちなみにここはリュウジンシティのセンターだ」

優「ああ、そういえば私中満君とバトルをして…あれ、その後の記憶が…」

秀「まあ、無理もないさ。お前はバトルで勝ってから暴走していたしな」

優「ふ〜ん、暴走、ねえ…」

優さんはそう呟いて、また寝た。

秀「さーてと、俺は優ちゃんの看病をしながら本の続きでも読みますか！…で、美太達はどーすんの」

美「そうっすね、またこっちでもミイシエの特訓をしようかな〜って考えてます」

秀「んじゃ、そうした方がいいぞ。中満はかなり強いからな。二つ目のバツ目指してがんばれよ〜」

…と、勧められたので、そうすることにした。

美「いつてきまーす」

ガチャ

〜数時間後〜

ガチャ

美「ただいま戻りました〜。結構頑張ったな〜」

秀「はいはい。お帰りなさい〜。…とりあえず風呂に入ってこい。ちなみに部屋は右隣りに取っしておいたから」

美「ほーい。りょーかいしました〜」

秀先輩に言われ、俺達は風呂に入った。

秀「そーいやさ、俺と直人が出会ったのって、この町だったよな〜」
香「え！そうなんですか？」

直「そうそう、俺が部屋を間違えて秀の部屋に入っただのが始まりだ

ったな」

秀「と、言う事で、回想スタート！」

直「何言ってたんだ？秀」

~~~~~

8年前：

まだ俺が10歳だった頃、スカイ地方で旅をしていたんだ。

俺はトレーナーになりたてで、見る物全てが新しい物ばかりだった。そしてこのリュウジンシティのバッジを手にいれたその日の夜：

秀「うん、やっぱりバッジっていいな」頑張ったかいがあるって  
もんだ」

ガチャ

直「うあ」風呂入ったら眠くなった、ってええええ！部屋間違えた！すすすみません！」

秀「ああ、いいよ。まあ、何かの縁だしこつち来なよ。少し話そうぜ」

そんなこんなで直人と出会い、話しているうちに意気投合して、一緒に旅をすることになったんだ。

~~~~~

香「へえ」そんな事があつたんですか」

秀「うん、やっぱり仲間がいると何かと心の支えになるし結構いいよ」

直「そうそう、：そういえば今何時頃だ？」

秀が時計を確認すると時刻は9：30だった。

秀「もうそろそろ風呂に入るか」

秀達が準備し始めると、優が起きた。

優「んっ、んーあれ、秀君、なにすんの？」

秀「お、優ちゃん、起きたか。今から風呂入るけど香織と一緒に入るか？」

優「うん、入ろっか、香織ちゃん」

そつして四人は風呂に入りに行った。

(第9話へ続く)

第8話 秀先輩の友達 後編（後書き）

暑いですね。

ちなみに7話の中満君が秀君に言った「チャン・スー」は、こんな感じで出来ました。

秀君↓秀ちゃん↓スーちゃん↓チャン・スー
こんな感じです。

命名者は俺の友達です。

復習・登場人物〳美太の不思議な旅〳（前書き）

とりあえず8話まで行つたので復習しましょう!!
気になるキャラの意外な一面も見つかるかも!?

復習・登場人物と美太の不思議な旅

美太：この物語の主人公。ポケモンマスターはベタなのでチャンピオンに勝つ事を目標としている。パートナーはミイシエ。

ミイシエ：美太のパートナー。どちらかというと物理技の方が得意。種族はシェイミ。

祐也：美太の友達。のんびり屋で天然。影が薄い。パートナーは葵。

葵：祐也のパートナー。几帳面でしっかり者。意外に祐也のような人になりたいと思っている。種族はポッチャマ。

香織：ひよんな事から美太達と旅をすることになった。（第2話参照）母親はコンテストの優勝者。パートナーは拓哉。

拓哉：香織のパートナー。ボールの中にいる時は常に読書をしている。読んだ本は一万冊を超えとかなんとか。種族はピカチュウ。

秀：美太達の先輩。ダブルバトルを得意としている。感情的でかなりの心配性。パートナーは優。

優：秀のパートナーであり、彼女でもある。（今リア充爆発しろと思った人は作者にすぐ謝る事。）イツシュ地方で秀と出会った。香織とともに仲良し。種族はゼクロム。

直人：美太達の先輩。シングルバトルを得意としている。秀の用意の良さを尊敬している。おっちょこちょいな面も。パートナーは竜我。

竜我：直人のパートナー。優とは昔からの友達。（昔と言っても秀と出会う8年くらい前）種族はレシラム。

復習・登場人物〱美太の不思議な旅〱（後書き）

どうでしたか？

香織ちゃんはDPで言うヒカリのパクリですね（ぶっちゃけた！！）

それでは第9話へGO！！

第9話 二つ目のバッジ目指して 前編

次の日：

美「うーん、…朝だ。って、あれ、ミイシエがいない」

いつも俺より遅く起きるミイシエが今日は何故かいなかった。

美「おはようみんな。…ミイシエは？」

香「そういえば美太より早く起きて散歩に行ったよ」

美「ふーん。じゃあミイシエと先輩を待ちながら朝ご飯の準備をしますか！」

美太達が準備をしていると、秀達が部屋にやってきた。

秀「おつ邪魔っしま〜す。おはよう、みんな」

祐・美・香「おはようございま〜す」

優「みんなおはよう。香織ちゃん、朝ご飯の準備、手伝うわ」

秀「朝ご飯の準備を女の子二人が仲良く作る風景…なんかいいな〜」

美「うーん、そうなのかな？」

そんな話をしているとミイシエが散歩から帰って来た。

ミ「戻った〜でしゅ〜」早起きは三文の徳って本当なんでしゅね〜
♪散歩をしてたら果物いっぱいもらえたでしゅ〜♪」

そう言ってミイシエは机の上に桃や梨を広げた。

み「おおー」

直「結構あるな。少し移動用に保存しておくでしょう」

直人先輩はバッグから取り出した小さい保冷庫に7個果物を入れた。

優「じゃあ残った分は食後用に切っておくわね」

優さんは残った3個の果物を台所へ持って行った。

（ちなみにミイシエは果物をいくつもらったでしゅうか？）

優さんも席に着いたので、朝ご飯を食べ始めた。

み「いっただつきま〜す！！」

直「美太、その醤油取ってくれ」

美「はい、どうぞ」

優「香織ちゃんのそれ、美味しそうね。少しもらっていい？」

香「いいですよ」

やはり料理はいっぱい作っても、7人もいたらすぐに無くなってしまふ。

み「ごちそうさまでした！」

秀「あゝ旨かった。ところで美太、今日はなにをするんだ？」

美「うゝん。今日は試しにジムに挑戦しようかな」と思っています」

秀「おお、そうか。頑張れ。奴は昨日見た通り強いからな。やっぱり力で攻めるよりノーマルタイプの弱点のかくとうタイプで攻めると良いぞ」

美「大丈夫です。また新しい仲間を増やしましたから」

少し部屋でゆつくりした後、みんなで中満さんのいるリュウジンジムへ行った。

美「開けますね」

美太がドアに手をかけようとすると

ガチャ

中「朝だ。今日も頑張ろってあれ、秀達じゃん。どしたの？」

美「僕がジムに挑戦しに来ました」

中「じゃあ準備をするからこつちで待っていてくれ」

み「はい」

中満さんに言われた部屋は広く、トイレやキッチンなどいろんな設備があった。

中「その部屋は自由に使っていていいからそこで待っていてくれ」

そう言う中満さんはドアを閉めて向こうへ行った。

その時

ガチャ。ウィーン

秀「あれ、いま変な音がしなかったか？」

秀先輩がドアを開けようとする。

秀「やべっ開かねっ、多分閉じ込められた」

み「ええええ！！」

すると部屋の何処からか声が聞こえてきた。

中「はっはっはっはーまんまと騙されたな！！」

秀「やっぱりお前か。こんな馬鹿な事するのはお前しかないもんな」

中「誰が馬鹿だと！まあいい。お前達には脱出ゲームをしてもらう。ルールはその部屋の何処かに入口の鍵がある。それを探してそこから脱出してくれ。すこし位ならなにをしてもいいぞ」

俺はモニターでお前達をみているぞ。と言って部屋は静かになった。

美「鍵か…よし、探してみよう」

俺がすぐ近くにあつた引き出しを開けると、鍵があつた。

美「先輩！！ありましたよ！！」

秀「いや多分それは偽物だ。そんなに早く見つかる筈がない」

確かに見つけた鍵をドアの鍵穴にいれてもドアは開かなかった。

秀「中満め、それで勝った気にいるのか？笑わせる」

秀先輩はニヤリと笑うと直人先輩を呼んだ。

直「なんだ？」

秀「…は…で…」

秀先輩は直人先輩に耳打ちをした。

直「いいのか？お前らしいな。ゆけっ竜我！」

直人先輩が竜我さんを出した。

竜「ほいほい、何でしょ」

秀「ちよつと、優ちゃん、こっちきてくれ」

優「ん？なあに？」

秀先輩は竜我さんと優さんにも小声で何かを言った。

優「本当、秀君らしいわね」

優さんも笑う。

秀「んじゃいくぞ…優！クロスサンダー！」

直「竜我！クロスフレイム！」

秀先輩達が指示をすると優さんは体全体に電気をまわって、竜我さんは手の上に巨大な火の玉を出して、両方ともドアめがけて放った。

中「ちょ、おまつ、やめろって」

中満さんの止めも聞こえず、

ドッカーン！

ドアは、壊れた。

中「おい！お前はなにをするんだ！」

廊下から中満さんがやってきた。

秀「何って、どっかの誰かさんに閉じ込められたから腹いせにドアを壊してやった」

中「…」

中満さんは悔しそうな顔をして、秀先輩は勝ち誇った顔をしていた。この二人は本当に仲良しなんだなあと思った。

中「全く、お前って奴は…まあ良い。それじゃ美太、準備が出来たからフィールドについてくれ」

俺はフィールドについていた。

中「それでは、始めようか」

俺と中満さんのバトルが始まった。

（第10話へ続く）

第9話 二つ目のバッジ目指して 前編（後書き）

「ちなみに」

秀「そういえば、美太、この話の中ででてきた問題、わかったよな」
美「はい、この問題って作者が話の中で問題をいれてみたいって言うどうでもいい考えから生まれたんですよ」

秀「どうでもいい考えはないだろ。作者さんに失礼だぞ」。ちなみに問題の答えは、直人が持っていた7個と優ちゃんが切った3個とミイシエが部屋に戻って来る時に食べた1個で11個でした!」

美「え!嘘でしょ!そんな事少しも書いてませんでしたよ」

秀「嘘嘘。本当は10個です」

美「なんだあ、嘘か」おどかさないで下さいよ」

秀「それではまた次回でお会いしましょう」

美「じゃ〜ね〜」

すいません。第10話はほかの物語の製作でちよつとの間更新できません。

DOG DAYS 「if」と俺と優も見てってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0334w/>

美太の不思議な旅

2011年10月9日14時57分発行